

カント読書会 1日目 2005/08/11 担当：大久保歩  
イマヌエル・カント、『純粋理性批判』上巻（原佑訳、平凡社ライブラリー、2005年）

『純粋理性批判』の歴史的背景—「近代」Modernityの始まり—

略年表（左の欄はカントに直接関わるもの、右の欄は同時代の出来事）

	1687年	ニュートン『プリンキピア』
	1689年	権利の章典
1724年	カント（Immanuel Kant）	ケーニヒスベルクに生まれる
	1737-39年	ヒューム『人間本性論』
	1751年	『百科全書』刊行開始
	1776年	アメリカ独立宣言
1781年		『純粋理性批判』第1版
1785年		『人倫の形而上学の基礎づけ』
1785年		水力紡績機の普及-産業革命の幕開け
1787年		『純粋理性批判』第2版
1788年		『実践理性批判』
	1789年	フランス革命
1790年		『判断力批判』
1797年		『人倫の形而上学』
1804年	カント	死す
	1804年	ナポレオン、皇帝に即位

近代のメルクマール：共和政・民主主義、国民国家（政教分離）、近代科学、工業化、資本主義

序文（25-75頁）から—『純粋理性批判』の構成

「人間の理性はその認識の或る種類において特異な運命をもっている。それは、人間の理性が、拒絶することはできないが、しかし解答することもできないいくつかの問いによって悩まされているという運命であって、拒絶することができないというのは、それらの問いが理性自身の本性によって人間の理性に課せられているからであり、解答することができないというのは、それらの問いが人間の理性のあらゆる能力を超え出ているからである。」（25頁 第1版）

人間的理性に課せられた問い：神、自由、不死

「解答することができない」：経験の限界を超えているから

「この果てしない抗争の戦場こそ形而上学と呼ばれているものである。」（26頁 第1版）

形而上学 Metaphysik：アリストテレスに遡る語。meta+physik「自然学の後にくるもの」（アリストテレスの学生による呼称）。世界の最高原因である「不動の動者」（=神）に関わる学。

「最初は形而上学の支配は独断論者たちの統治のもとにあり、専制的であった。しかしながら、その立法は古代の野蛮の面影をなおとどめていたゆえに、その支配はいくどかの内乱をつうじて次第に完全な無政府状態へと墮落し、土地のあらゆる永続的な開墾を嫌う一種の遊牧民にほかならない懐疑論者たちが、ときどき市民的団結を分裂させた。」(26-27頁 第1版 )

合理論と経験論：

1. 大陸合理論(ライプニッツ、ヴォルフ)：無矛盾性のみを根拠に推論を進める。 事実を参照しないため、独断論 Dogmatism に陥る。
2. イギリス経験論(ロック、ヒューム)：認識の根拠を感覚や事実に求める。 帰納に基づくため、普遍性にいたることができず、懐疑論に陥る。

カント：両者を批判する<sup>1</sup>。

「それゆえ私は、神、自由、不死を、私が思弁的 spekulativ 理性から過度の洞察をなしうると称するその越権を同時に奪い去ることがないかぎり、私の理性の必然的な実践的 praktisch 使用のために想定することすらできない。[...] それゆえ私は、信仰に席を与えるために、知識を廃棄しなければならなかった。」(60頁 第2版 )

『純粋理性批判』の構成：

1. 超越論的原理論：認識の可能性の条件を探究する。
  - (a) 超越論的感性論：感性 Sinnlichkeit の二つの形式、空間と時間を論じる。
  - (b) 超越論的論理学：悟性 Verstand を論じる。
    - i. 超越論的分析論：ア・プリアリな認識の可能性の条件を論じる。経験の限界が確定される。
    - ii. 超越論的弁証論：原理の能力であり体系化する能力である理性 Vernunft が産出する、神・自由・不死という超越論的仮象 Schein を論じる。これらの仮象は、経験の限界を超越しているがゆえに、さまざまなかたちで否定される。
2. 超越論的方法論：理性の完璧な体系の形式的な条件を規定する

---

<sup>1</sup> 「ライプニッツは現象を知性化したのであるが、それは、あたかもロックが悟性概念を概念発生説 [...] という一つの体系にしたがってことごとく感覚化したのと、[...] 同様であった。悟性と感性とのうちに、諸表象についての二つの全く異なる源泉でありながらしかたがいに結びあつてのみ諸物について客観的に妥当する判断をくださうような、そうした二つの源泉を求める代わりに、これらの偉大な人物たちそれぞれは、二つの源泉の一方にだけ固執し、この一方の源泉が彼らそれぞれの見解にしたがって諸物自体そのものと直接的に連関付けられたのであるが、他方の源泉は、一方の源泉から生ずる諸表象を混乱させたり秩序づけたりすること以外には、何もしないとされたのである。」(507頁 第2版 327)

序論 (77-142、1-31)<sup>2</sup>

純粹認識と經驗的認識との區別について (77-82、1-3)

- ・あらゆる私たちの認識は經驗でもって [ mit 英語の with にあたる。強調引用者 ] 始まる。認識能力は対象<sup>3</sup>によって働き出すようよびさまされる。  
時間的には私たちの内なるいかなる認識も經驗に先行することはない
- ・しかし、あらゆる私たちの認識が經驗から [ aus 英語の from にあたる ] 発するのでは必ずしもない。

私たちの經驗認識ですら、私たちが諸印象をつうじて感受するものと、私たち自身の認識能力がおのれ自身のうちから供給するものから合成されたものでありうるから。

・ア・プリオリ / ア・ポステリオリ / 純粹 :

1. ア・プリオリ a priori な認識 : 断じてすべての經驗に依存せずに生ずる認識
2. ア・ポステリオリ a posteriori な認識 : 經驗をつうじてのみ可能であるような認識
3. 純粹 : ア・プリオリな認識のうち、なんらの經驗的なものをも全然混入していないような認識

例 「あらゆる変化はその原因をもつ」: ア・プリオリな命題だが、純粹ではない。なぜなら、変化というのは、經驗からのみ引きだされうる概念だから。

私たちは或る種のア・プリオリな認識を所有しており、だから普通の悟性ですらそうした認識を欠いてはいない (82-89、3-6)

・純粹認識を經驗的認識から確実に区別しうる徴表 :

1. 必然性 經驗は、或るものが別様ではありえないということを教えない
2. 厳密な普遍性 (いかなる例外も不可能) 經驗は、おのれの判断に、ただ想定された比較的な普遍性 (帰納による) しかあたえない

必然性と厳密な普遍性は互いに分離しがたく結びついている

・ア・プリオリな純粹判断は、人間的認識のうちに現実にある

例 1 数学のあらゆる命題

例 2 命題「すべての変化は原因をもっていないなければならない」

ヒューム : 生起するものには、それに先行するものがしばしば伴い、このことにもとづいて、これらの表象を結びつけるという習慣が生じることから、原因の概念を導出しようとした原因という概念は、全面的に消えうせる。

例 3 物体の概念 : 物体の占める空間 / 客観の概念 : 実体性

哲学は、すべてのア・プリオリな認識の可能性、諸原理、および範囲を規定する一つの学を必要とする (90-98、6-10)

<sup>2</sup>これ以降は、特に明記しないかぎり、カントからの引用である。第2版を基本的に参照する。[ ] は発表者による補足を示す。「」 「」 は因果関係を示す。「」 は対立を示す。ページ数は、日本語訳、原書第2版の順に示す。

<sup>3</sup>ここで「經驗」が「対象」と言い換えられていることに注意が必要だろう。つまり、この文脈では「經驗」と「対象」は、論理的にいえば、同値である。

・或る種の認識は、すべての可能的経験の分野をすら捨て去って、いかなる対応する対象も経験のうちではどこにも与えられない概念によって、私たちの判断の範囲を経験のあらゆる限界を越えて拡張するように見える。

・まさしくこの種の認識のうちに、私たちの理性の諸探究がひそんでいる。私たちはそうした諸探究を、重要性からみて卓越しているとみなし、その諸探究の究極意図を崇高であるとみなし、そのさい私たちは一切を賭そうとするのである。

・純粹理性自身の不可避的な課題：神、自由、不死

形而上学：これらの課題の解決にのみその究極意図が向けられている学

・[こうした諸探究に向かうにあたって、その基礎作業として、] いったいいかにして悟性はあらゆるア・プリアリな諸認識へと達しうるのか、またいかなる範囲、妥当性、および価値をそれらのア・プリアリな諸認識はもちうるのかという問題が、いち早く提出されていることがたしかに自然的であるが、しかし、こうした研究が長くなおざりにされざるをえなかったということも自然的で明白である。

1. 数学的認識は昔から信頼を勝ちえており、だからこのことによって他のア・プリアリな諸認識に対しても好都合な期待がかけられている。

2. 人が経験の圏域を越え出ているなら、経験によって論駁されない。

私たちの理性の仕事の最大部分は、私たちがすでに対象についてもっている概念の分析にある。この仕事は、すでに思考されているものの説明や解明以上の何ものでもないにせよ、それでも少なくとも形式からみれば新しい洞察と等しいものと評価される。

分析判断と総合判断との区別について（98-107、10-14）

・すべての判断：主語と述語 [ Prädikat 賓辞 ] との関係がそのうちで思考されている

・主語と述語の関係の二様式：

1. 分析的：述語 B は、主語 A のうちに（隠れて）含まれている或るものとして、この概念 A に属している。同一性によって思考される。解明判断。例「すべての物体は広がりをもつ」

2. 総合的：述語 B は、たとえ概念 A に結びついているにせよ、この概念の全く外にある。同一性なしで思考される。拡張判断。例「すべての物体は重さをもつ」

・経験判断：経験判断としては、ことごとく総合的。

分析判断を経験にもとづけるのは、不合理であるから。分析判断を作るためには、私の概念から出てゆく必要はなく、経験のいかなる証言も必要としない<sup>4</sup>。

・しかし、ア・プリアリな総合的判断のさいには経験というこの補助手段は徹頭徹尾欠けている。例「生起するすべてのものはその原因をもつ」

悟性が、A という概念の外に、この概念 A とは無縁であるが、それにもかかわらず悟性がこの概念と結び付けられているとみなす述語 B をみつけだすと信ずるとき、悟性がそれにたよる

<sup>4</sup>第一版では次のように言われている。「総合的判断のさいには私は、主語の概念のほかになお何か別のもの（X）をもっていなければならない、この何か別のものに悟性は、主語の概念のうちにはひそんでいない或る述語を、それでもこの主語の概念に属するものとして認識するためには、たよるということである。/ 経験的判断ないしは経験判断のさいには、この点に関してはいかなる困難も全然ない。なぜなら、このXは、私が概念 A によって思考する対象についての完璧な経験であって、その概念 A はこの経験の一部分をなすにすぎないからである。」この「X」は、のちの「純粹悟性概念の演繹」で「対象 X」として再びあらわれてくる。

あの未知のもの = X は、この場合何であろうか？

・総合的原則に、拡張原則に、私たちのア・プリオリな思弁的認識の全究極意図がもたづいている。

理性のすべての理論的学のうちには、ア・プリオリな総合的判断が原理として含まれている (107-118、14-18)

1 数学的判断はことごとく総合的である。

・本来の数学的命題：いつでもア・プリオリな総合的判断。

例1 「 $7+5=12$ 」 12 という概念は7と5の和という概念には含まれていない。12 という概念を導くには、直観の助けが必要。

例2 「直線は二点間の最短距離である」 直線概念はなんら量を含まず、ただ質を含むに過ぎない。ここでも直観の助けが必要。

2 自然科学 (物理学) はア・プリオリな総合的判断を原理としてそれ自身のうちに含んでいる。

例 「物的世界のあらゆる変化においては物質の量はあくまで不変である」「運動のあらゆる伝達においては作用と反作用とはいつでもたがいに等しくなければならない」

3 形而上学のうちには、ア・プリオリな総合的認識が含まれているはずである。形而上学は、少なくともその目的からみて純然たるア・プリオリな諸総合的命題から成っている。

純粋理性の普遍的課題 (118-130、19-24)

・純粋理性の本来的課題：「いかにしてア・プリオリな総合的判断は可能であるか？」

この課題を解決することができるかどうか、形而上学の存亡はかかっている。

例 ヒュームの場合：結果と原因との結合という総合的命題 (因果性の原理) は全面的に不可能であり、私たちが形而上学と名づけているすべてのものは、事実上はたんに経験から借用してきて、習慣によって必然性の外観をうるにいたったものを、理性の洞察と思い誤るたんなる妄想に帰着する。

・先の課題の解決のうちには、次の問いの解決が、いっしょに含まれている。「いかにして純粋数学は可能であるのか？」 「いかにして純粋自然科学は可能であるのか？」

・純粋数学や純粋自然科学は現実に与えられているが、形而上学は現実に存在しているとはいえない。

・ところが、形而上学は、自然素質としては現実的である。 人間的理性は、おのれ自身の欲求に駈りたてられて、理性のいかなる経験的使用によっても解答されないような問いにまで絶えまなく進んでゆき、かくして現実にはあらゆる人間のうちに、何らかの形而上学はあらゆる時代にあったのであり、だからあらゆる人間のうちにつねにありつづけるであろうから。

「いかにして形而上学は自然素質として可能であるのか？」

・形而上学に関しては、私たちの純粋理性を安んじて拡張するのか、それともそれに明確な安全な制限を設けるのかの決定にさいして確実性に達することが可能でなければならない

「いかにして形而上学は学として可能であるのか？」

・それゆえ、理性の批判は結局は必然的に学へと導いていく。 批判なしでの理性の独断的

使用は、懐疑論へと導いてゆく。

・この学が関わるのは、たんにおのれ自身にすぎず、全部おのれの胎内から生じ、だから、おのれ自身の本姓によって、おのれに課せられた諸課題である。

理性が、経験においておのれにあらわれる対象に関して、まえもっておのれ自身の能力を完璧に知っていたなら、経験のあらゆる限界を越えて試みられるおのれの使用の範囲と限界とを、完璧に規定することは、容易となるに違いないから。

・この学は、本来の形而上学、つまり、その分析的なもののア・プリアリな認識を総合的に拡張する形而上学に対しては、ひとつの準備にすぎない。

純粋理性の批判と名づけられた或る特殊な学の理念と区分 (130-142、24-30)

・以上すべてのことから、純粋理性の批判と呼ばれうるある特殊な学の理念が生ずる。

理性は、ア・プリアリな認識の諸原理を与える能力であるから。純粋理性は、或るものを端的にア・プリアリに認識する諸原理を含む理性である。

・純粋理性の批判：純粋理性とその源泉と限界とを判定する学。純粋理性の体系のための予備学。純粋理性の理説 Doktrin とは呼ばれない。その効用は消極的で、私たちの理性の拡張にではなく、その純化にのみ役立ち、私たちの理性を誤謬から遠ざける。

・超越論的 transzendental：対象にではなく、むしろその認識様式がア・プリアリに可能であるべきであるかぎりにおいての、対象についての私たちの認識様式に一般にたずさわるすべての認識

・超越論的批判：認識自身の拡張ではなく、認識の是正を意図し、またすべてのア・プリアリな認識の価値ないしは無価値の試金石を与える。純粋理性の機関に対する一つの準備。

・超越論的哲学：一つの学の理念。純粋理性の批判はその全計画を、建築術的に、言い換えれば諸原理にもとづいて、この建物を形成するあらゆる部分の完璧性と安全性を完全に保証しつつ、立案すべきである。

純粋理性の批判：必ずしもそれ自身超越論的哲学と呼ばれない。それが一つの完璧な体系となるためには、ア・プリアリな人間的認識全体の手落ちのない分析をも含まなければならないはずであるから。

・超越論的哲学：何らかの何か経験的なものをそれ自身のうちに含んでいるいかなる概念も、全然入りこんできてはならない。超越論的哲学：思弁的な純粋理性の哲学。すべての実践的なものは、それが動機を含んでいるかぎり、経験的な認識源泉に属する感情にもとづいているから。

・超越論的哲学の区分：純粋理性の原理論と、純粋理性の方法論を含む

・感性と悟性：おそらく共通の、しかし私たちには未知の根から生じているところの、人間的認識の二つの幹。感性によって対象が与えられ、悟性によって対象が思考される。

・感性：ア・プリアリな諸表象を含んでいるはずである。そうしたア・プリアリな諸表象が、私たちにその下で対象が与えられる条件をなすかぎり、感性は超越論的哲学に属する。

・超越論的感性論は、原理論の第一部門に属さなければならない。人間的認識の対象がそのもとでのみ与えられる諸条件 [ 感性 ] は、その同じ対象がそのもとで思考される諸条件 [ 悟性 ] に先行するから。